

## 研究者：鈴木 瞳

(所属：東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 口腔健康教育学分野)

## 研究題目：同期型遠隔形式による歯科衛生学生主導型の多職種連携教育の 実践と教育効果の検証

### 目的：

多職種連携で主体的役割を担える歯科衛生士の育成には、卒前教育からの主体性の涵養が重要である。そこで、本学では、歯科衛生学生が主導する形で、口腔ケアに関する多職種連携教育を実施している。しかし、2020年度はCOVID-19の影響により、多人数の対面授業が困難となり、本授業も従来の実習形式から遠隔形式に変更して行うこととなった。2020年以降、歯科衛生士教育においても、遠隔教育が導入されてきているものの、その教育効果検証は、未だ十分とは言い難い。そこで、本研究では、歯科衛生学生主導型の多職種連携教育を同期型遠隔形式にて行い、授業後の学生による授業評価ならびにレポートの分析から、その教育効果を検証することを目的とした。

### 対象および方法：

#### 【対象】

2019年度、2020年度に「合同口腔ケア実習」を受講した東京医科歯科大学医学部医学科、歯学部歯学科・口腔保健学科口腔保健衛生専攻（以下OH）の3年生の計363名を対象とした。

#### 【方法】

2019年度までの3学科合同授業は、OH学生が、医・歯学科学生に対し、シミュレーターおよび相互での体験実習を通して、要介護高齢者の口腔ケアを指導する内容の対面学習であった。2020年度は、COVID-19の影響により、対面授業を中止し、同期型遠隔形式にて実施した。オンライン上にて少人数の3学科学生の混合班を構成し、OH学生が事前作成した資料を用いて、セルフケア体験を含む口腔ケアについての説明とディスカッションのファシリテーターを行った。

#### 【データ収集】

2020年度授業終了後、OH学生を対象とした授業評価より、合同実習に対する満足度、伝えたいことが十分伝えられたか否か、オンライン合同実習への自由意見などについて回答を得た。

医学科・歯学科学生からは、2019、2020年度の実習終了後アンケートより、口腔ケアの方法、意義、注意点ならびに歯科衛生士の役割について理解できたか、回答を得た。さらに、授業後「口腔健康管理の重要性」「本実習の感想」というテーマでレポートを提出させた。アンケート回答については、Mann-Whitney U testを用いて対面実習とした2019年度、遠隔授業にて行った2020年度を比較、検討した。統計解析には、SPSS<sup>®</sup>（Ver.26.0 IBM、東京）を使用した。レポート内容はKH-coder<sup>®</sup>を用いた計量テキスト分析を行い、実施形式の異なる年度別の医学科・歯学科学生の意見の違いについて検討した。

なお、本研究は、本学歯学部倫理審査委員会より「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」の範囲外であるため倫理審査非該当との回答を得ている。（受付番号D2021-041）

## 結果および考察：

### 1. 遠隔形式の授業後のOH学生評価

OH学生の授業評価への回答率は、81%（17名/21名）であった。オンラインで行った合同口腔ケア実習の満足度は、88%が「満足」「やや満足」と回答し、その理由として「達成感が得られた」「自身の知識の定着に繋がった」と回答する者が最も多かった。合同実習において対象者へ伝えたい事が伝えられたかという設問では、82%が「そう思う」と回答した。実習時の医学科、歯学科の反応・コミュニケーションについては、遠隔であっても積極的な交流が図れた、他学科学生への指導を通し知識の定着に繋がったという肯定的な意見が多く得られた。

### 2. 実施形式（年度）による医学科・歯学科学生のアンケートならびにレポートの比較

医学科・歯学科学生のアンケートの回答率は、2019年度92%、2020年度96.2%であった。口腔ケアの意義、注意点、方法ならびに歯科衛生士の役割について理解できたかという設問では、実施形式の異なる2019・2020年度いずれも9割以上の者が「とてもそう思う」「そう思う」と回答し、実施形式による差を認めなかった。（図1）

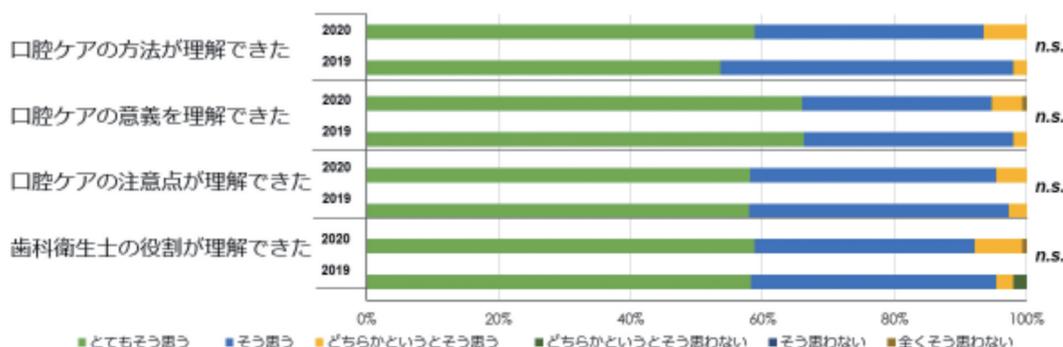


図1 医学科・歯学科学生の実習後の理解度について年度比較

続いて、医・歯学科学生レポートの計量テキスト分析結果を示す。「実習の感想」についての分析では、「実習」「口腔ケア」「思う」「口腔保健学科」などの用語が高い頻度で抽出された（表1）。さらに、年度・学科別の特徴的な用語を可視化することを目的に行った対応分析の結果を図2に示す。円の大きさは用語の出現頻度を表し、中心から離れるほど特徴的な用語を表現している。2019年度の特徴としては「難しい」「患者役」など実習を通して得られた体感を示す用語を多く認め、2020年は「保湿剤」など指導媒体に関する用語、「他学科」「連携」など他学科との連携を意識する用語に加えて「有意義」といった用語が抽出された。

表1 出現回数の上位10位「実習の感想」

抽出語	出現回数
実習	187
口腔ケア	186
思う	154
口腔保健学科	135
実際	105
学生	92
患者	89
行う	88
感じる	85
自分	84

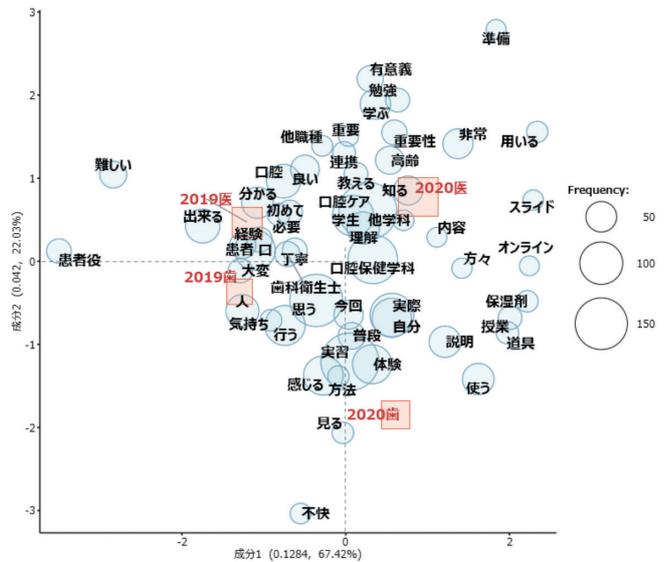


図2 レポート「実習の感想」の対応分析

次に「口腔健康管理の重要性」に関するレポートの分析結果を示す。頻出語は、「口腔」「重要」の順で多く、「誤嚥性肺炎」も高頻度で抽出された（表2）。対応分析の結果からは、2019年度については「痰」「実習」「出来る」といった実習に関連した用語に加えて「肺炎」「誤嚥」「口腔ケア」といった用語が特徴的であり、誤嚥性肺炎予防としての口腔ケアという視点で口腔健康管理を捉えている様子が示唆された。一方で、2020年度は、「生活」「食事」「栄養」「口腔機能」「QOL」「全身」「健康」といった用語が多く抽出されており、口腔健康管理を、単に口腔ケアや誤嚥性肺炎予防としての意義だけではなく、より包括的な意義として捉えていることが示唆された。

表2. 出現回数の上位10語  
「口腔健康管理の重要性について」

抽出語	(出現回数)
口腔	281
重要	200
口腔ケア	189
患者	173
口腔健康管理	155
誤嚥性肺炎	121
健康	111
状態	98
行う	90
予防	89

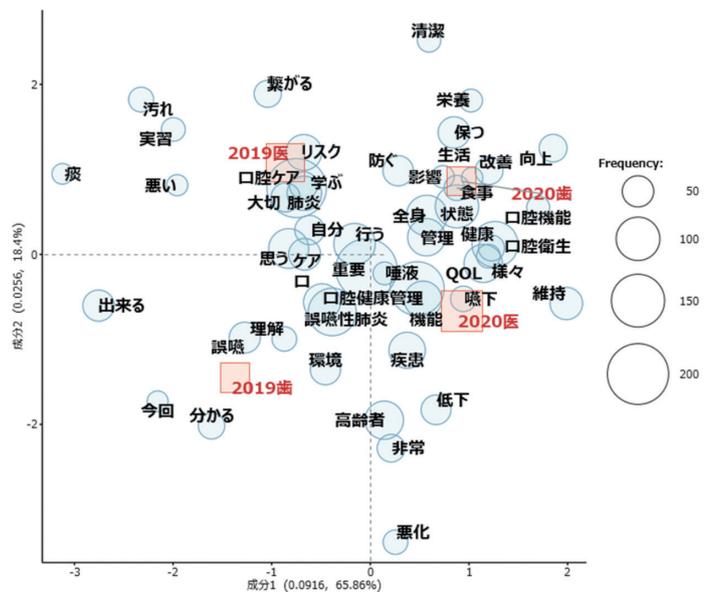


図3 レポート「口腔健康管理の重要性について」の対応分析

これらの結果より、資料を活用した体系的な説明と同期型遠隔形式による体験実習を組み込んだ今回の合同授業が、学生の高い満足感と授業理解、連携への意識などに繋がった可能性が示された。

パンデミック下においては、歯科衛生士教育も様々な制約を生じ、実施が困難となる実習・演習も少なくない。今回実施した口腔ケアに関する連携教育は、パンデミック下における連携教育の一手法として有用であることが示唆された。

今後は、本結果で得られた遠隔授業による利点を活かしつつ、コミュニケーション等の遠隔授業による課題についても改善策を検討し、より効果的な連携教育の実践に活かしていきたいと考える。

**成果発表：**（予定を含めて口頭発表、学術雑誌など）

第40回日本歯科医学教育学会学術大会にて結果を報告した。また、2021年度の実施データを追加、分析をして教育関連学会への報告を予定している。